



高江の座り込みテントに別れを告げ、私たちは大浦湾への道を下りました。車窓から穏やかに広がる光る海が見えました。また、沿道にはブーゲンビリア、サキシマ芙蓉の花が咲いています。そういえば、沖縄には紅葉がないようです。どこも緑、みどり、ミドリでした。「慶佐次湾のヒルギ公園」に途中下車しました。慶佐次川にはマングローブが両側にありました。マングローブという木はなく、水に生える数種のヒルギの木々をマングローブと総称すること。アマゾン川のような、亜熱帯の世界です。若者たちがカヤックを楽しんでいました。なんとも静かでのどかな風景でした。ここは1959年に当時の琉球政府によって、天然記念物に指定され、1972年の沖縄本土返却によって、日本国指定の天然記念物となったとのことでした。

那覇へ向かうバスの中で、日本ジャーナリスト会議の吉原功氏が沖縄の歴史についてお話しされました。その中で、私には二つのことが特に印象に残りました。まず、沖縄は19世紀末までは、琉球王国という外国であったことを理解しておくこと。また、尖閣諸島は古くから日本固有の領土ではなく、琉球王国の領土であったということです。

1429年に統一がなった琉球王国は、大国の明、清の海禁制度、また、日本の鎖国制度が幸いしたのか、東シナ海を自由に動き回り、交易を担い、恭順で、穏やかな友好関係を保つ小国でした。

1609年に薩摩藩から侵攻を受け、日本による武力の圧迫に屈するようになりましたが、対外的には独立国でした。

1879年に維新政府により「琉球処分」がなされ、沖縄県となりました。

1895年、日清間でもめていた領土問題は、日清戦争の勝利により、日本が琉球全域を日本の領有地としました。

1945年に太平洋戦争に負け、琉球列島は、連合国の管理下に置かれ、アメリカの軍政の管轄下に置かれました。

1972年に沖縄のアメリカ管轄下の領土は全て日本へ返還されました。けれども、この間、中国、台湾は、好漁場である尖閣諸島付近への立ち入り、上陸などを繰り返してきました。日本側は沖縄が占領下にあり、実質的な統治も、領有もできなかったのです。返還直前から中国、台湾から領土問題が主張されるようになってきました。

1972年の中国との国交正常化の際に、領土問題である尖閣諸島を「玉虫色の決着」にしたといわれています。琉球は日本の武力によって翻弄され続けました。また日本の領土としては109年間の歴史しかありません。

古代には国境もなく、人々は自由に行き巡り、争いを避けて、賢く生き抜こうとしていたようです。人間の支配欲、物欲が大手を振るいだし、豊かで、穏やかな人間の営みをぶち壊し、「我が物顔」が幅を利かせた近代には、本当に世界は醜くなりました。沖縄にいと、原初の世界を「気持ち」的に今も生きている人々がいると感じます。

後日、首里城見学から帰る時に乗ったタクシーの運転手さんが、「沖縄は、徳川さんなんかより長〜い、450年の歴史を持っているのさア」と誇らしげに言われました。「日本の城は砦の役目もあるけれど、首里城は無防備のようだね」と夫が言うと、「琉球王国に武士はいなかったさア。昔から歌って、踊っている国さア」ということでした。